

《焦点1》シンポジウム

シンポジウム「それぞれの当事者性」のコーディネート

—「修羅能」と「苦悩の語り」に導かれた能舞台での饗宴—

山崎裕美子*

*姫路獨協大学

Coordinating the Symposium “Involvement of Each Tojisya-sei”:
A Symposion on the Noh Stage Led by “Shura Noh” and the Keynote Speech
“Suffering Narratives”

Yumiko Yamasaki *

* Himeji Dokkyo University

キーワード	
コーディネート	coordinate
饗宴	symposion
苦悩の語り	suffering narratives
幽玄世界	subtle and profound world

I. はじめに

テーマを「それぞれの当事者性」と冠することになった本シンポジウムには、企画段階から参加した。そしてどのような方にシンポジストとして壇上に上がっていただくかについて論議した。「患者」「家族」「専門職」という、代表性のある「立場」設定となった。発言順は「専門職」→「家族」→「患者」で、学会員の多数を占める「専門職」から開始し、「患者」は不可欠の当事者として最後の発言となった。

テーマの如く、自らをその立場上の当事者・主体として語る、ということ、患者・家族であろうが専門職であろうが、どの立場にあっても必ず「自分自身」の「生き様」を「語る」ことが、暗に求められていた。その点を外さないコーディネートを考えた。

II. 能舞台という開催場—時間的超越性と幽玄性

会場は、奈良春日野国際フォーラム内の能舞台に決まっていた。日程交渉にあたった梓川一大会長によると、大会初日がぼっかりと空いていた。下見の

際、現代的建造物であるフォーラム内に、能舞台会場に拡がる異色の和の空間—檜の香りと幽玄の舞台—を実感した。

大会は、「修羅能」の解説付き上演で始まった。会場は時代をさかのぼり、私たちは千年の昔の物語から、いわれなき苦悩とその昇華という暗黙のテーマを受け取った。続く基調講演では、病を生きる自分、並走する人々や家族の生き様、苦悩、希望などが語られ、場の焦点は、現代における保健医療行動に絞り込まれてきた。

III. 「饗宴」—すべてが参加者という原点回帰を目指して

各シンポジストの発言に先立つコーディネーター発言として、スクリーン上に次のように提示した。

能舞台でのシンポジウム とは

幽玄世界での饗宴!?

—この世とあの世がつながるこの場で、歴史を感じながら・・・

すべてを包摂するこの世界で「当事者」と

なり、「当事者とは？」と問い、論じてみよう。

「シンポジウム」の語源は、酒を酌み交わし昼夜を徹して各々が演説し意見を述べ合う「饗宴」¹⁾にある。とすると、この能舞台会場でのシンポジウムとは、いわば幽玄世界での饗宴であり、シンポジストも聴衆も皆、当事者として語るべき内容を持ってそこに集っている。そしてその核心部分には、苦悩というものが潜むはずである。

そこで、シンポジスト発言の前に、数名のフロア発言をいただいた。シンポジストと聴衆という垣根をまず越えて、皆「苦悩を語る饗宴」の一員、という立場を確認して開始しようと考えた。「患者」「家族」「専門家」そして「探求者」といった立ち位置が垣間見える内容が述べられた。

これにより、各シンポジストや参加者に響いたものが少なからずあった。シンポジストのスライドや原稿は、あらかじめ準備してきたものであるが、シンポジストには、できるだけ自らの中心から発せられる、力のある言葉をもって発言してもらえたらと考えていた。「饗宴」を意識したコーディネートによって場のエネルギーは対流しやすくなり、伝える力は増し、相互作用は強まったと観測している。

IV. 登壇—「患者の立場」高野氏にとっての通過儀礼

能舞台でのシンポジウムという設定そのものが大きな試練(バリア)となった人がいた。「患者の立場」の脳卒中体験者・高野直也氏は、能舞台への会場からの登壇(階(：きざはし)を利用した手すりなしの階段昇降)が困難であった。共に登壇経路の検討や下見・試行に時間をかけた。最終的に、会場裏手の楽屋口経路で、舞台には右手奥の切戸口から入るという経路を選んだ。しかし切戸口は少し身をかがめて入らねばならない設計になっており、その上、後方の鏡板は神聖につき「触れてはいけない」ものだった。このような条件を備えた能舞台への登壇は、片麻痺による杖歩行の氏にとっては挑戦そのものであった。

もちろん、舞台下に席を準備することは可能だった。しかし氏は登壇を選択した。過程で試行錯誤し

ながら、「よし、これでいく！」と思い切り、新たな動作を工夫・獲得しつつ壇上の席までたどり着いた。その行動は氏にとって、いわば一種の通過儀礼のような役割を果たしていたようで、迷いは徐々に消え、壇上の姿は清々しかった。コーディネーターとして、その過程への立ち会いは感動であった。

V. おわりに

前日エクスカーションで訪れた東大寺。建立に携わった主要人物のうち、光明皇后(701～760)は「悲田院」「施薬院」の設立と貧者・弱者への奉仕活動、行基(668～749)は貧者・弱者への奉仕活動や土木事業で知られる。会場は広大な奈良公園にあり、東大寺に隣接している。一步外に出ると、東大寺の黄金色に輝く鴟尾を載せた甍が、1300年という歳月にわたる当事者たちの生老病死と、その人生の苦悩や行動を想起させ、古都・奈良における開催の意味を問うてくる。

この開催が何か意味を持つのだろうか—自問すると、「当事者」として、まずからだの中心に問いを据えよ、と返ってきた。

文献

- 1) 新村出：広辞苑第7版(新村出編)、岩波書店、1526、東京、2018。